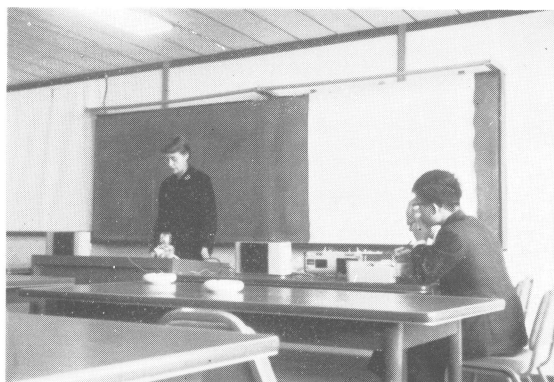


K. Labitzke 博士の講演

(吉田一男氏写真)



〔写真1〕 ラビツケ夫人の講演



〔写真2〕 通訳する須田理事

山 雲 の 機 構 (10)

大 井 正 一

(山を越える前線)



〔写真1〕 36. 8. 6. 10時 (天狗岳にて右より
剣, 立山, 薬師, 黒部五郎岳). 北西方
向より高層雲, 巻層雲が押し寄せ, 左
端に最初の積雲堤が見える



〔写真2〕 13時ごろ (白馬鑓の登りにて立山剣)
連峰に雄大積雲の堤が出来, 上に巻層
雲

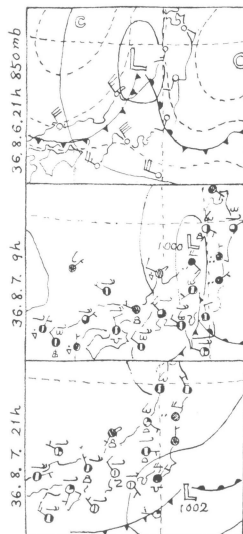
昭和36年8月3日夜私共4人(長谷川, 城所, 川合, 大井)は上野駅を後に山に向った。台風 Helene は速度を増し乍ら日本海上を東北進するものと思った。これはラジオ天気図上からも天気予報からもそう思われた。然し事実は台風崩れの低気圧は4日も5日も6日も日本海上に停滞し続け、然も大塚解説官の名言句「腐っても鯛」の名に背かず新潟地方に豪雨を起し、ラジオ天気図を描

いた登山者達数名を凍死に追い込んだのである。私共も唐松小屋で籠城し乍ら凍死に近い人々を救ったり、列びの白馬雪溪で凍死した話を聞いたりしていた。又他の友人達は北鎌尾根で食う物もないビバークを続けていた。これは次頁の天気図に見る如く鯛の両側に寒気が頑張っていたためであった。然し6日の夜10時頃から星が見え始め7日の朝は雲海上の日の出を迎えた。4人は勇躍出



〔写真3〕 14時ごろ（白馬鍾頂上より毛勝三山）
雄大積雲の堤は消えて滝雲となって流
れ下る。巻積雲は頭上にあり、巻層雲、
高層雲の堤は徐々に接近

発して稜線を北上し不帰の嶮を通過、天狗の大下りを登りつめた。そこで休んだ時の10時頃の写真が写真1である。これを見ると黒部源流の向う即ち日本海方面から巻層雲や高層雲が押し寄せているのが判るが、私共は全くそれには気付かず、ラジオ天気図の通り日本海上には何も無いものとして縦走を続けた。13時頃になって天狗小屋で遅い昼食を食べ、雪溪を登りつめて、白馬鍾ヶ岳の登りにかゝった時、多くの登山者が剣岳の方を指しているの、何気なく見ると剣から薬師迄の稜線に著るしい雲堤が見えた。これが写真2である。これはどうしても天気図にはない前線が来たと判断せねばならない。不安のうちに鍾の頂に立って再び見ると、意外にも雲堤は消えて雲は滝雲となって黒部の谷に流れ落ちているのであった。これが写真3である。後ろに高層雲が見え出した。此の山は写真2のやゝ右に当る毛勝三山である。これで私は、はっきり天候悪化を予測し、縦走を諦めて白馬鍾温泉に下ってしまった。日本最高の野天風呂に浸っている夕方6時頃に頭上を著るしい高積雲の帯が東進するのを見上げた。夜に入って再び大暴風雨になってしまった。翌8日昼迄待ったが少しも衰えないので、滝の様な豪雨に降られ乍ら帰った。但しこの雨は次の低気圧によるもので天気図でも判断出来た。若し温泉



に逃げず縦走を続ければ再び白馬附近で2、3日の籠城を迫られた事と思う。この日に私共が認めた前線は天気図上には少しも現われていないことは、図の9時、21時の天気図から明かで、従って温暖寒冷の何れとも断定し難い。然し前線であった事はほぼ確かだと思う。8日の雨は温暖前線によることは天気図上からも明かだが、写真のものがその前駆現象であるとは考え難い。兎も角私は此の経験から次の結論を引き出した。

1. 夏山では前線が来る前には巻層雲、高層雲が広く帯状に認められる。
2. 前線が剣、薬師等稜線に出逢うとそこに雄大積雲が発達する。その上には巻積雲が出来る。
3. 更に前線が進むと雄大積雲は消え、滝雲となって山を越える。巻層雲、高層雲の帯状の層は依然として認められ、徐々に接近する。

尚此の推移は必ずしも前に〔1〕に説いたものと同じではなかった事に注意されたい。この場合は夏で山沿いに予め垂直不安定の状態にあったためにそこにだけ積雲が発達したのである。

参考文献

- 〔1〕 山雲の機構（9）：天気 8（1961）303 p.